

第十四講 暗黒時代

土器編年による年表

| | | |
|--------|-----------|---------------------|
| LHIIIC | 1200-1125 | 破局からの再興・中心地や丘陵地への集住 |
| (SM) | 1125-1050 | 集落の極端な減少 |
| PG | 1050- 900 | 既存の墓域の拡大と新集落の建設 |
| EG | 900- 850 | 集落規模の拡大 |
| MG | 850-760 | 新集落の漸増 |
| LG | 760- 700 | 新集落の激増・英雄崇拜の始まり |

史料状況：

文献史料の欠如・記念碑的な遺構の欠如

ギリシア人の意識の中では、青銅器時代の英雄たちの直系の子孫らが王国を維持継承し、ポリスに橋渡しした時代。

考古学的には、住居址ではなく墓地遺跡が中心。

時代編年は土器の表面に描かれている図像によるが、年代の根拠は明確ではなく主観的。

暗黒時代とは：

暗黒時代＝長いトンネル：両端に明るい光が差し込む

一方はミケーネ文明、他方はポリス文明

ギリシアの歴史では特に珍しい事ではない。既に EHIII から MH に掛けての、即ち前 2200 年頃から 1600 年頃にかけての暗黒時代もあった。

従來說：

ホメロスの叙事詩・ヘシオドスの作品・後世の文献や碑文資料に言及される「太古からの遺制」・考古遺物の芸術的水準の「低さ」と「質的貧弱さ」を根拠に>

啓蒙時代以来の発展史観的モデル（ポリス＝国家以前の「野蛮」な段階）に準拠し、階級分化以前の「部族社会」モデルの適用>民族移動による社会・文化の変動説
>ドーリス人の移動>青銅器文明の破壊>物質生活の低下>部族社会への退行移動に伴う方言群の分化・鉄器の導入・火葬の導入・クレーロスを基盤とする小農民社会の形成

近年：

ドーリス人の移動を証明する証拠はない

鉄器は LHIII B にエーゲ海のコス島にすでに現れている（北方からではなく東方のアジアから伝播）

集合墓から単葬墓への移行もギリシア内部の伝統の中に求められる＝MH の墓制の継承

火葬はアルゴリスでは早く、アテナイでは遅いが、アルゴリスでは青銅器時代の文化である集合墓が見られ、アテナイでは非ミケーネの単葬墓が見られる＞新来の種族によって新しい墓葬文化がもたらされたという考えと一致しない。

LHIII B と LHIII C との間に文化的な断絶・飛躍は見られない。

方言群の分化や分布・分化の変化を説明するのに民族移動を持ち出す必要はない。

P. クレッチュマー説：

前 2000 頃 イオニア人→中期ヘラディック

前 1600 頃 アカイア人やアイオリス人→ミケーネ文明

前 1200 頃 ドーリス人→鉄器文化＞

青銅器文明の終焉は短期的な破壊によるよりは社会の長期的な変動による段階的な変化と初期鉄器時代への連続的移行=fade out

青銅器文明の文化的特質は暗黒時代を通じて徐々に薄れ消えていくが、しかしその中でも継承されていくものもある。

古典期ギリシアにおける方言群の分布は西方方言群（北西ギリシア語方言群・ドーリス方言群）集団と東方方言群（アッティカ＝イオニア方言群・アルカディア＝キプロス方言群・アイオリス方言群）集団の移動によって引き起こされたのではなく、青銅器時代にすでにギリシアにおいて生じていた方言群分化が暗黒時代において加速された結果である。

方言群の言語学的相違は従来考えられていたほど大きくはなく、両方言群の使用者同志の理解は容易であった＞ドーリス方言群集団をギリシアの青銅器文化圏の外に置く事は出来ない。

鉄器時代に入ってからの方言分化は東方方言群、とりわけイオニア方言群において最も著しい。

暗黒時代のギリシアの社会を原始的な部族社会と評価する事は出来ない

＜極端な身分制社会

従來說：ポリス社会が持つ原始共同体の遺制（部族・兄弟団・氏族）に着目。それを説明する為に先行する暗黒時代に原始共同体社会を想定。

Gemeinschaft（共同体）：ポリス

Gemeinwesen（共同制度）：pyle, phratria, genos, oikos

Gemeinde（共同態）：共同体成員間の平等性（klerosの堅持＜売買・譲渡の禁止・prasis epi ryseiの慣行；公有地と私有地の並存＝私的所有原理の抑制）

暗黒時代を自立的な kome（農村）共同体の散在する社会と想定してきた。

今日：極めて厳格な身分制社会

史料的に原始共同体の遺制とする諸制度が暗黒時代に存在していたということを直接証明する証拠はない。

ドーリス人がギリシア世界にかかる遺制を持ち込んで来たという証拠も存在しない。

暗黒時代の社会は前代の青銅器時代の社会を継承し、時代の社会経済的な状況の中で適応変貌を遂げてきた。

wa-na-ka とそれを支えた官僚機構の消滅

地方からの集住現象＞中心地の肥大化＋地方集落の激減

新たな住民間の階層化・序列化＞身分化

有力者の basileus 化（basileus とは本来地方の有力者の事であり、王を意味するものではなかった。そのような用法はホメロスにもヘシオドスにも残されている。）

下層民層の排除と上層民の閉鎖化

↓

極端に少ない墓の数＝人口が急減したのではなく、排除の論理の結果副葬品の均質性＝均質な社会集団＝アガトイ

文化的伝統の連続性：中心地の存在と長期的持続

伝統文化の継承：地名・神々の名前・ワナクスやバシレウス、ゲロンテスなどの
役職者名、土器の器形や装飾意匠など

アッティカ：アテナイ

アルゴリス：アルゴス、ミケーネ、ティリンス、アシネ

メッセニア：ニホリア

青銅器時代の地域的凝集性の維持

アッティカは暗黒時代を通じてアテナイを中心に統合されていた

幾何学様式の土器文化の地方への伝播

地方の有力者の間にアテナイの文化が積極的に受容

＝地方は強くアテナイを志向していた

アルゴリスはアルゴスなど複数の中心地に分散統合

＞数多くの独立した農村集落の存在を前提とする（シュノイキスモスを説明する為に）従来説は成り立たない

中心地からの内地植民

PG：アテナイ→マラトン・メニディ・エレウシスなど

スパルタの集落の形成

LG：既存の集落→アッティカ全域に小集落の建設

墓数の急増・不均質な副葬品＜墓地集団へのカコイの受容

活発な交流

物品や製作者集団は様々な地域を移動していた

アッティカの SM＞アルゴリス＞ラコニアのエピダウロス・リメラ

メッセニアの PG＞ラコニアのアミュクライやスパルタ

実体経済

オリーブの花粉値の急増＝オリーブ栽培の普及

マケドニアの倉庫＞様々な種類の穀物＞農耕の実施

ナラの急減とマツの急増＜ヤギの牧畜

→牧畜社会に移行したのではなく、定住型の農耕にオリーブ栽培と
牧畜が加わった

首長＝指導者の存在

アルカゲタイ（スパルタ）・デミウルゴイ（コリントス）・アルコン（アテナイ）

＜バシレウス

神と人間を仲介する存在＞地上における正義・秩序の維持

カリスマ性の要求＜螻蛄

行政上の主権は持たず、アテナイのポレマルコス¹の例から想定されるように軍事

指揮権は首長以外のものが掌握していた

官僚機構の欠如・伝令のみを伴う

生者の世界と死者の世界・神々の世界が区別されず墓地は集落の近く

子供や乳幼児は家の床下や軒下に